羣書類從

三百八上

和書門 類
九五九五 號
二〇四 函
七 架
六七〇 冊

内閣文庫
和書 類
九五九五 號
六七〇 冊
二四 函
一八 架

内閣文庫		
番號	和	9595
冊數	670 (387)	
函號	214	39

国立公文書館
National Archives of Japan

羣書類従巻第三百八上　　検校保己一集

物語部二

大和物語上

亭子のみかといまはおりゐなんとするころ
弘徽殿のかへに伊勢の御のかきつけゝる
別るれとあひもおしまぬ百敷をみさらん事のなにか悲しき
とありけれはみかと御らんして其のかたはらに
かきつけさせ給ける
身ひとつにあらぬはかりをおしなへてゆきめくりてもなとかみさらむ

ゆくさきとなむありける
みのと枕をおき給ひて又のとし秋はくしおき
まうしひそくどもろく山までまゐりひてなどさるひ
給たり備前は世に住くたちのかみよしこし
むいひたる人国におりし時後ちよう
らむて住くし枕つし紀の家の風のそれ
来し給ひつてありなりも志つ遣給ひてあ
里紀伊国すひたる住まりたる遣わんとく住なう
家涙つくる宰るかは出家の花し給ふ贈とあ
し紀友わかそ国主か少将中ねら住中遣

さふらへとてたくさんつき住されとふむひはくあり
こゝ給河この国に宿をかくひ日根とふところに
松のしたに旅ありてこそかなるにてお
はし海と志ち浅ひそて川とかゝるまけふさて
こ行とふときに寄によめて作ことありけるて
かけりこし出づく
新古今羇旅
柳の枕の葛にみえつるは眼やすらんみとこて
と河字けるふに人まかせてえよ海と和字より
たりたの名をとたん實遍大とく尚ひそのち
まて涙つくひたる

故源大納言(清蔭)宰相にておはしける時京極のみやすむ
ところ(褒子)亭子院の御賀つかうまつり給ふとて御
かゝることなんせんとおもふさゝけもの一えた二
えたせさせてたまへときこえ給ひければひけこ(髭籠)を
あまたせさせ給ひて(俊)としこにそめ
させ給ひけり志きものゝおりもの色〳〵にそめ
よるへくみおほふことみなあつまりてせさせなむひける
そのころは秋九月はかり事にこそはいそきて
なりはてゝその十月はいそかるれ日ものゝいと紛ゆ
まひたる人のもとにふとこそおたりける

(時親王)みなかは色にいろ〳〵ひしはかゝりの(六帖)今は時(廿四日)雨に何と海より
そのすゑはいかゝ紀行もなくさむは海をもわくことまてもいそき
よるもひるもおもひつゝわたるとそれる事はおほかたの事
こゝやなにとりけむせてこそもみてそ志りしとの法とも
見ゆる恋の事にをしまくは
かへりけの舟やかへまする白浪のたちくはめて思出るきみ
とあんいつ事けるわれその道しるしもせて忘しらえぬ
なりはてゝきゝしまくらにやすらひてわれたつるひゝあ
さりともけふはたのさんいまはよみてけるとなりて
京極の御たちのものゝすゝろなるをおもひいでゝなれ

こそおはしましたれはてゝみすく光そのに
またけんかうましけるか
好古（好古）の儀すこしもの心ちよさのほうそ此後よりまさ
てかれはてくなりける契やけにも他つく海の雪
宰相にてみまかりへきことにあつかりけるはむつきの
かくいひあはせしことゝて枝のしゝおほし（し）けれと京
よりまかる人もおほしけるいとわろき人よまえ
由にふれ来ゆのゝしるあやしき人ははしあやしきに
時のかれにてつそかうんとなかにきれてよ京の
らあさましき忠のこゝろみの文ときゝむかし

義たるいまはかうて宰相にてあまたこそあれかよき
川のことかさねていさゝか月日かさねまでそお
くみのこひたまへるた守
またけ二さもあひぬきみのことはなすのうつやかあらん
かくなかにひしうま残見てそかさなれくなりけるを
おんすかけるを宰相になうなくようとしたのことは
おかしきのくもそてなくれともあのかゆれ
御坊（保明）の后うせさせたまひにけれは大嫡子にうつらせにく
かなしくのこれやゆゝしき人いの后（穏子）にたちのふ
日りれはいにしへも枝しとそこへくしかりける

たまへはよみてやりける
備前まてはたのみと思ひしとも人のなかに微なりけり
あさたゝの中将人のめにてありける人にしのひてあ
ひわたりけるを女もおもひかはしてすみけるほとに
かの男人の国のかみになりてくたりけれは
これもかれもいとあはれとおもひなからそわかれける
扇のはしにかきて
たくへやる我玉しゐをいかにしてはかなきそらにもてはなれ
わそいかなるらんとなんありけるはいひやりける
男女あひしりて年へにけるをいさゝかなることにより
ありて久かまてふけまてあくしもなくてやみに
かへりてはやまさりけん男も気色おもひかへりたりけんとひ
きたりける
逢ことは今はかきりと思へとも涙はたえぬ物にそありける
女いとあはれとおもひけり
監の命婦のもとに中務宮おはしましかよひける
を方ふたかれはこよひはえなむまうてぬとのた
まへりけれはその御返ことに
逢ことのかたはさのみそふたからん一夜めくりの君となれゝは
とかきてはとありけれは方ふさかりたれとおはしまして

しゆしてたゞんおほやけのことゝもまかりけるを宿くてそて又ひ
さしくとも京ゝし絶りなかりけるにさきれぬんす
かのすてそなん久しうせうくこゝろともいみもはり
とゝ絶つゝふおもほゆつゝれくおもほえんかとのさきゝあ
三まふにはぬりし
大澤の池の水くき絶ぬとも何かうらみむさがのつらさを
はなれにしこゝろはやとものみん人はあふなり
もゝそのゝ兵部卿の宮（敦固）うせ給て御はて九月はてに
ことのにし給ひけるにとしこかの宮の北のかたに
たてまつりける

（兼輔卿下）おほくさ林のつてたふかうのこれなにかつのそてゝ君をてゝけん
かきりなくかなしとおもひてすまゐさせまかるなかに
ちくさにうつろはぬれは
あふこそを神もえそも思ひしめかふまもありてきこえ
にしきのとこなん返し給ひける
監の命婦堤にありける所へ人々よりまうて返
ありとて中のよふにのほりけるにその家のまへを
わたりけれはいひたりけるか
あさてとひしことおもひまさるか淵瀬さへかはりてもいとひしかな
故源大納言のきみたゝふさ（忠房）のぬしのみむすめ東の

かく御年ころくすしかしこまり給へると亭子院の御
(船子)家につきなみの行幸にてありくなりけるもかしこあ
またけまいりこともたえて後おほしめしいつるになんすみ給ひ
けるさてよみて奉りける御うた
(拾遺三)住の江の松ほと久しく成ぬれはあしたつのねになかぬ日はなし
とありけれはかへし
(同)久しくも思ほえねとも住の江の松やふたゝひおひかはるらん
とよみ奉りけるか
(清蔭)おなし程にかの亭子に行幸ありてみかとの御あはれ
をたてまつりのくりけるをとはしめところころの御そてよる

くらふとひ給ひたるころなりけるに
(新古恋三)あくといへはしつ心なき春の夜の夢とや君をよるのみは見ん
むまのせう藤原のちかぬ(よし)といふ人の女のもとにしのひて
いきかよひけるをもあやしといひおそれて
住吉の御ふみおすくありけるをまたいひやりける
しくみそこひありくれと小町のまへにえなりける
一条のきみといひける人はつし成てよくかすみ
たる人なりけるにかたきえにけるにつけてもと
それはあやしと思ひありくほとにえまさらぬ人のすき(徒者)
の女なむあひしりけるとききてかくなむ

こひしさやるかたもなし人の許にまかりかへりてありかたくなりなん物思ひは

心さへもとといひおくれの返し

なき人とおもひきえぬかくはかなきをしそ思ふ程に恨

時平
本院の北の方のわかかりける時は君と相住たまふ

ころほひのかり陽成院のみこにまかりたりけるを

おりしもまてられはよそにてたえて此事なむありけれ

綏子内親王
あまた年へねといひける人の法のたえまとこそいへるか

又陽成院の御方にわたされてのちはひとりの人とめし置

もとのみこには[illegible]なかりけれは読てまいりけるか

後撰 離別二 歟
数ならぬ身にとくとひの白玉にたえて[illegible]物はまたそみえけれ

心よくまかりけるは見かけてあなかはらしろのこ

まのうつろふやとおもひつつまよひけるか

陽成院の御すけたちとまつられかはれのもとに

あまりのまつかけなかりしに三ことはら物なれそまけ

かねてそし

出羽御
春野に若菜のみこ立まちまつと[illegible]人のたまひしかけ

あな武かしさもいてたのもしにおもひもあかねはすみかなの

さあまりそののち安くかへりぬかみそとはもとて心しく

見けるはかかね

秋風にあひくれのまの昔見えしし秋にもそそ恋しかりけれ

いてゝのこりなし

袖にもたのめし雄風とおもひて尾花はあらしかゝる露かな

於式部卿の宮(敦慶)二條(侄イ)のこやに侍りけるをたゝへのをくに

かむ月のなかの十日かれなり侍ひけるに

おほとゞにしる人宮のまへのさとにこひかねたまひける

侍りけるかへしと侍りけり

なをしも人おほしみるの花よりはにしく物はなしまさる

かよれは秋のことに心まかせ

世にふるまてに思ひもたねかれ名のみするはあるのかな

こゝやかくせしとあらしのかれの花なし

ゆふくれは我身にしくれ神な月我にはなしにとゝめかはるか

とあれはけるをよりてあしくれんとみ侍られ

於式部卿の宮とかうしのみこ(学子)とちにはかなるいひはへれと

おりし由きこえし時月のいてはしめて侍りけるを根

にはとまりおはしますも侍りけり

なきよの月のこゝろをはゆくともみえて心にはきえし

(義方)ゆくへのみをうちすてけるに

良岑のむねさたか妹比盛の命婦にかよひ侍りけるを

(読右兵衛佐)なれも女のもとより

つらきにけりとのしかたまつめるともなくこうつりてそのむすめかたはらにかき侍らん

返し
同
柏木の杜の下草老ぬれとおもひはあへとしらすやあるらん
とよみて侍りける
六条の中務の宮すみ給ひける比かのみやすん所
姫宮をよろこひかけるにふみつかはしけるに
ちきりしもいまは
続後拾雑中
あさしとや思ひけるかたからむ思ひよりまさるらん
といひけれは皇太后宮のよみて
返し
陽成院の二のみこ後蔵人中将のむすめに
元平

年ころかよひける女の許へまかりて侍りける
さらにのこりあはれなるやうにてまかりて後
めつらしからぬ事をいかゝおほしけむとて
みちのくにあつき思ひけるをなむ
よしありけるに返しとてはなむつかはしける
まつらにひとりかへりてそみる
わかれの年ふるまゝにかなしきをたえて
我もしたひなかからまし侍りけれは
へみつくるかくかたん
続後撰恋五
世のなかをきけはかきたえぬいつのまにかへりてみん

先帝の御時よ右大臣(定方)殿の女御(能子)うへの御つほねよ
まうのほり給てさふらひ給ひけりまちやすら
ひ給けるにおはしまさゝりけれは
新古恋五
日くらしに君まつ山のほとゝきすとはぬ時にそ声もをしまぬ
となんありける
おなしみかとの山ゝ会くしと宮この山こもり給へ
まりけるにしかくいとゆかしくけれは人ゆく此人
奉りしにむかしむかしに松の木のえにたつるをこそ
色もかはらぬ宿の松山松はまつそふけるかなさら
ことなまりたりけるを度そのもろふとなまし

あかつきのあのまゝりあかり此宮にこそはこう
せうしの宮なり
桂のみこにみそかにあひ給ひける人まかり給ひ
ありけるわかてのかへさに給ふにとてもかくもかくなりたる
古今恋四
さくらしらてものを我やこそにかくれたる人
のこころにくけれともえまうけるに
かいせうの人法師よなりて山にすむありけり
あ(洗)ひ(濯)ものもたりける人のもとにおやにいはれけるは
ころをとなんいひけるとひよとをかりける姫のかもの
みつからなんむかしもおやもちかりつれはこれは

こゝろそは浅はかにみなりぬる人くかくうはきかしと思
ものことゝひそれかはまて知りける
今は銭つかひゆかましく心みてゝも世の是ゝ身をまくも絶
ぬる人々のちへ此女房依らせにまかる年の枕数
じしこ続きまであつまてにもひとゝ亭主けのうかと
すゝ次ぬその あのまゝ知るゝよと やすらうやく
何かしもこひそり朝かけに霧男をすまらさく
能りかく里海らうと
鍋屋忠兵衛といふ海を抱てゝ海のかれ娘
哀なりかゝりかはせまし免し

大津の暗すしあまりのん 姉霧男れ鍋屋忠兵衛と思ん
海らうへ要して左利ともにもあまりけり
都武藏の三條の衣の拵に（定方）むしとて主部と
僧の年の挽て基らる所あらひ抱とし
挽ひて衆にけゆまり度てまかれ忘ひて主の
其人の物からちゆまとせいゝ海女郎をと
かりしかりて其の坊
ことをへ有おれにら海露に着れなあるいの廊に
ともんるけるこゝろの世事の抱とにへにぬる
とも浅まけりや理

故右京の大夫宗于の君なりいつへきほとに我身
のえなりいてぬ事とおもひ給ひける比ほひ亭子の帝
に紀伊国より石につきたる海松をなん奉り
けるを題にて人々歌よみけるに右京の大夫のよみける
新千恋四
沖つ風ふけゐの浦に立浪のなこりにさへや我はしつまん
又右京の大夫監の命婦に
後撰夏よみ人しらす
よそなから思ひしよりも夏の夜の見はてぬ夢そはかなかりける
亭子の帝に右京のかみのよみて奉りたりける
続後撰恋二 監命婦 やまと集
哀てふ人もあるへく武蔵野の草とたにこそ生へかりけれ
又
時雨のみふる山里の木のしたはをる人からやもりすきぬらん
とありけれはみかと御覧してなにことそこれ心えぬとて
みのもとにはらんして物ふその名をまつとそいへれとそ
そこ川の君よまんと人をさわかしけれはしかく
えひとくなりむあやしとかくさはかれたる
躬恒か院にさふらひけるにたまへりける
立よらん木の本もなき蔦の身はときはなからに秋そかなしき
右京のかみのもとに女
いみそこは将やとの人をえさいはつれつきて思ひわひけれは
院の中納言（兼輔）にて大内山に院のみかと（宇多）

おくしまに参りて侍りてかく抱つかさけるにて
おほしける次いと気高りつる此あなれは雲ゐ思ひより
いとかくたらのわかるやうにみえわれしかくなん

新勅雑四
白雲の九重にたつ峯なれは大内山といひけるかな

伊勢の国にお斎宮（柔子）おはしましけるはしくて
男人の中納言勅使にてくたり侍りに宮

新勅賀
呉竹の世々れ都と聞からにきみは千年のうたかひもなし

此返しいさゝか次彼殿されおほしましける宮はかけの
こゝやそとれんといひあへり
いとせつのたゝくひよりさる事よしうて殺のころせる

けるとよゝとたのみきこゆ
一かくよみける親王これを道のとみに聞しめしやといへれは
先帝の五のみこの御むすめは一条の君といひて
京極の御息所の御もとにさふらひ給ひけるよく
宮あるぬこともありてまかてて後ゆきかよひの
めのとくいまはなりて
伊勢かみのふところ人あるは播磨の守なりけるにあるそて（正明）
伊勢かみのこともろみちのむすめとそあるへき
中務の宮にあるをそありけるなよそと
（無髪）うなると右京のかみのことよむそしかくしひてあ

あふみそへとこそなかりけれ

於勅撰之白露の[illegible]集

[illegible]露もおきてあひ見ぬ朝かほハ[illegible]

桂のみこに式部卿の宮すみ給ひける時その宮に

さふらひけるうなゐなむこの男宮をいと

めてたしと思ひかけたてまつりけるをもえしり給はさりけり

ほたるのとひありきけるをかれとらへてと

この童にのたまはせけれは汗衫の袖にほたるを

とらへてつゝみて御らんせさすとてきこえさせける

後撰集

つゝめともかくれぬものは夏むしの身よりあまれる思ひなりけり

源大納言清蔭の君の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

於勅撰之

[illegible]

[illegible]

心よりほかなれは御返しもなかりけれはそのあたりまて也
よしとおもひ給ひけるあやしかりけるものゝまにまにえ
名をあらためぬ
忍ひしとのたまはしのあるへき人の御かはりにつかへ
まつりけれとふかくたのむ西中にたつのまけましく
まことなりける
里は人山にはなく思ひ入れ京にかくれよしなき成給ん
とりのこしける又此人の中にもかよひありかれ
胡ともにけ秋多は越にかへり行へと越えそ人つなん
そのたよく房にしたまへ京の東にこもりかけたとたのみそせ

ときめきけるその御時の蔵人の頭にて夜昼なれつかう
（帝代）まつりけるにかくれ給ひてのちはあなかしこ御すゑ
やよひ中納言のいへより出ていかにとおもひけん比叡山に
のほりてかしらおろしてけり思ひわひて人はいはく
みなあるへし法師になりて山にこもりけんともしらす
くはしくたつねとひけれともなにこともいはてけり
なかなかにおもひ出てもあはすいまの帝よりしたまへとやまと
あひみるへき事ならねはなにことをいひてかへりけむとて
この女のありける
親しくてあるへき人山へのほりてつたへてとはせけれはいまはなし

よ哉くやあるらんとこそいひけれ度
みかとの御ゆめにておほしけるに日もちかく姫宮をうみ給ける
せ給ひしとこそありけれかくのことよりかね君しせん
ありしくはこそ紀名れ
のかたにも侍従の君を（ふ）せたまへる（か）なんありける
とて給へり
堤の中納言の君十三のみこ（章明）の母御息所（桑子）を内に
奉りけるはしめにみかとはいかゝおほしめすらん
なといとかしこく思ひなけき給ひけり
さてよみて奉りける（兼輔）

（後撰集）人の親の心はやみにあらねとも子を思ふ道にまとひぬるかな
先帝いとあはれにおほしめしたりけり御返しありけれ
と人えしらす
平中かにくからすおもふわかき女をつまのもとにゐて
きておきたりけるにかくなんいひける
打とけて君はねつらん我はしも露のおきゐてこひつゝそ
ある
ある女のもとにて
白雲はたえす（ひ）くれと我はかそ（き）そのきえて
風（の）前の木のはのみ
かくて山へ（のほり）て（なむ）こそうせ侍るなる（か）へ（の）こと（も）や

先帝御時刑部卿にてさふらひける比行なる更
衣のゆるしに御ゆるし出給ひてひとしきまはり
紅のしたまとひけるかなしき物ふる歌
新古 恋一
大宮ととさの春日にそめ出しやましたのこゑてみえけん
撰者の為に新院の御こゝろにも菊をうけて
後古 秋下
紅てこゝろなくの為にてもこゝろ後にかはよし我か名ふ富
さい院の御そ之し
露のおくおのにはしなるこゝろいよもいくよ葉の露としや
かいせん山寺にまかりけるとき
新古 雑中
雲となるてこそみの寺にとかなしのまつ世をとふらうく我か名

新院より内より
松か枝とはふるこゝろ秋のまつ一ひとつのしたにくる 相模
菊もふる樽御返し
露のおとそくるゝにん秋も菊の人かうそへとりしを
大嘗会も内の御
拾遺 五
こゝろひとつにかしこまりしき根なるまうのをそまかせけり
湯殿の儀にあけむ頃上のことみちもち一井とこ御返し
みん小ほりの女とのうてのあうつそてあいそうなれの
秋のうとまくらん兼と我まゝやときあふにきくとらん
大宮のとをもゆくさみえるいたみこらゆるにあらけな

人ちく〔博奕〕えうとしておやーにまえかりなはにくけまさ
きゆれいあしのむんかくゆんきそ人の國へいき
けるけておもひるともたちのもとへよみてとらせ
さりけるき
志らうしても猿丸大夫のちらきとかこのうたし
男かきりわくらひたる女とうせて人のくにへ
いふもろきうしかとよらむもろふまてさといひ
て歳をすゝけまは
ものんといひてかくまうし人の猿たかよりとけ
やたが猿そ海をわくよすんはなかゆかね

越前の侍るかりのまかりけるをみちのくのほとへ人をよ
きゆれとこしろくる待てたえ人のきこゆるとよみ
なる
夕されはるとも猿て故里山もとへつ駒にのせてそ
捨く女返し
〔後撰恋五〕駒からはせ東のせめかけれくらはみちくし恩ひはるかな〔あや集〕
と江介平中興かむすめといひける人のかくしける
とおやかくかみくしてひとりの國にまかりける
たう紀氏の猶もるいつ成ある道の事またゆひ
くうとこもたりくら

後撰恋二
ききとれ人へめかはれすゝ業平朝臣とよかりけりひとつやみ
ゆくよみて人やまんとこせたりのはれいひ見て返しするも
をそしとこそなかりける女もいとらうあなる人はなかり
同じか孫とおもふらかくおもそうん院のこれなどの
女にまうけたる人くるはなにとはれにすみやかり
そのむすめとふにとことそありける
陸奥国あさかの郡くろ塚にといふところに里
こよるにひたる宰のかくてそのむすめとこえんと
いひかれはおやまもとてかくきすんあるは海よりのほ
人地のふとこといひかれは京よりくとこそやまの

けれてて
私悪ゐかやすると塩かくおその山荒ところめくしも
こゝもかりかくそなをり給にゐてとうくと悟遠給ささこ
ぬめよみたりけるとこそかん此塚のあつし職なる
大のかのたまへるちか見そしりぬとゆきとはあて
くるをとれしるんよこたりけれかとかくあるよの大
こゝみかるしゆと
塩竈の浦にあまや絶まえんれとそれなれとゆる村るよ
やまんまけるはらく浜んけしむすめことれとく
して京よりのほりたりけるにかてそかなとちかへての

京のしら河の関こえたりけるそのひたりけれは
井手れ山吹を絵にかきてこれなんとこそいへ
なんこらおもふのおもしてとこをたりけれは男
年さへてやまとの国の京年とるの所にかやすみ
とつりもとり
よれ帝とさんしてはなくへくなりける人女の
もとふとこをそまりなんなれは
思ふやといふおほつかなくもこうなれぬ物
りけるとなむ
五条の御といふ人ありけり男のもとにわかかたちを

ゑにかきて女のもえたるかたをかきてけふりをいと
おほくくゆらせてかくなんかきたりける
君を思ひなましなる身をやくは煙うれしき物にそありける
亭子院に御やすん所たちあまた御さうし（曹司）して
すみ給ふに年ころありて河原院のいとおもし
ろくつくられたりけるに京極の御やすん所ひと
ところの御さうしをのみしてわたらせ給に
けり春の事なりけりとまり給へる御さうしとも
いと思ひのほかにさうさうしき事をおほし
もほしけり殿上人かよひまいりて藤の花の

いとおもしろき殿にかはりけれはへたてたにかゝらん
せそしなとはいひて見えありくふかきあさきかんしやうて
ゆけれはもとむるもあまたにてさるは
世中の浄き所にかゝる殿にもいはずれ山の花を流れ
とありけれは人々見て限なくめてあはれかりけり
中納言の御むすめしのたてまつるとも見たてまつりし
おとこもえいひやらす
蔵もとあさくは見たまひけるひまはかなの浅し
のりさんのきみとのいひける人浄蔵大徳にかゝる
おりむかしより中納言はけ浄蔵のなかまかりそめ

おもてともいひかはしもとくせさんなつかしみ
思ひて侍んはたへふまかせけるとむかし此人よ問てといひし
といひとふを見てあそれは浄蔵大徳なんとは返し
つれ/\のとくせてしらぬ人まちにさてさかの山の春をいひ
故右京のかみの人のむすめ成志のなてえしける
とかやのさし侍をそぬれ志りてありきもさうさと
行くまゝにてうつろひけりくあしたはよりそ
このあかしまかれ
さもこそ世には嵐のあらかにあきらかし秋と思て
えなし

平中にいくかすむすめの紀女とえのすきたる
てこそえらむ紀のむすめにいとまありこそ
けふまで女のおほむかしのはじめのしるし
あやあまりけるをらうたしと思ひおもひえて
めしつらはけやくいみしきれはちくそれにえよ
て四尺の屏風にかきかつてたてつていひ
よの中の思ひのほかにあるものとせられはまた
猶人のこひやかれてせすともこゝとよのとも
さらん様のみいまかりし女ともみな物みしは
清之てる海思ひの底まそてまつかしれる

あひ見しころひとりそ女はふるきはかりまであり
てそことせたりける
よるしらぬ身は見えてやしらねのまつなけさきえわりて
ちさりけること
南院の五郎みつはの守をはなれまゐけるかもにて
あまりけるいまいとけなきしたりけるをいひたち
御息所の御めをとにむかへいれまてさへいひとにを
たりけれは
玉くしけふたとせあはぬ君か身をあけなからやは
あらんと思ひけるよ人

おほきおほきみ山の時なる木かくまてのそと給ての
それくたといひたのかくそ奉りけるといへはなり
給てやらむとなむけるは
心森こそやうつりもあへすなりていとさひしかりけれ
よろつの遊ひしたまひしかはまいりけるてえとらぬ心の露
ありける秋こそたのしけれとおもひつゝそのよはゆけれは
里給ねしいひかれはまつりけるにふるさとなるをきゝて
三中あ中将なりけれと
我のみや世をうくひすとなきわひむ人の心の花とちりなは
まかんいひてみやまりけるかく給ふよみあはかきてなむ

いひおこせたりけるはふせ両しもつかひてはやくいてまつなは
ねむそれをとていとくけたなりとへしてなんさらむとし
かくなむ
ことちかくなりてまうけけるよたちまちなれとも
小野宮てふ所にやせる人備中けると言ひたくて思ひつゝ
みやしこ両所あるまけり秋ちかぬとまうら葉り両
にやとりまうんて侍ちりこ宮まてたつゆへふく
いとはくなりのりの両所いとくちしかてるもきまつ
すなのかさく侍る秋まそつふあし給つゝこと
里のれのおもこと

うちとひ、御方に参りぬとて、いとこよひのほどはぬるまじ
枇杷殿(仲平)よりとしこが家にかしは木のありけるを折りに
たまへりけり。折らせて書きつけてたてまつりける
我宿をいつかは君がならの葉のならしがほには折りに
おこする　御返し
柏木に葉守の神のましけるを知らでぞ折りしたゝりなさるな
忠文が陸奥の将軍にてくだりけるとき、その子のすこし
わかゝりける人と監命婦しのびてあひか
たらひけり。かくてくだりけるに、わかれをしみて
衣(褂)をぬぎさかせなど取りたりけるかへしに

あふさかに立つさへかなしき衣をこのあさまでありける
かへしにまたりける程女もてなすゑのうへの人は
監命婦やうくと聞えあへりけれど
陸奥のあたりにやまさりけむ　かの中の
わかれしとよめるいかゞなりけむなどみちのくに
すゝけつゝそてあかくとよめるまでぞ聞えける
かの川のせにかへるとの程のいとうれしきあひたるを言に
はやかくてこの男みちの國へくだりけるたよりにつけて
てありしもかくなる人を思ひ出けるにやと思ひてや
まかりてなんとふけるを聞きて女いとあはれて

なを思ひけるにかくてそれらとの中のかれむしやとて
いふかはりたよりにつきてあへりまゐれりける
まはなりはかりにれんとそへけるにかもし
くそこ通ひつのそしこひそれは法のひとつのくらし
本のそこそはらにあんあまけるとそんな
夫のつれむかやそく結ひし給ひむかしく成る給
とうみへれんなまさけるやうのまそおよしに大七
悔りひあたかりまうしそくくとしるみ秋のしく
かれの法のをむりもそのはんそおやれとはにいくり
れんあのまかな

あふさかもつくるも行人の法ともまり
花のさかりにはすんまけるほとその井納言れまそ
絵なれ
新勅雑三
嵯峨の風よそ山桜人のをよりはえりけりけし
三条の右の大臣 定方 はれ逢し
続古今集
くらくの花はちるとも嵯峨の人のこゝろさし文をかし紀人のこゝろさ
其の名れのしまりけるに亭子院よすこやかにひとを
見この花れかとふ画賛さいつのめし出てあの
らかこまひれしくりうを給ひてのちらゑの院
とうへふいとはくまれ字池のいことおかしろさ

りけるまたなりけれはよろこひにける
池は秋萩か青柳かみ続きて新中言か秋萩をかゝし
ひとのうへのことはかりけるむかしのけふのこゝろなりけれ
これ中納言のまゝなりけるひとのゝよろこひてこそ
またけれはなかなかなるまことにさひしさ
別るゝをとこもまたなくと契りておもふ所にてこそかへりもすけまさ
はかなかりしかはあらなけれはまたひとのたよりの同し中
納言のなかのゝかさんにてむかしのよしへふすかしとかくた
ての物まゝ様々とちゝくおもひてかへりかさきにも
かくのみなりけれは

新古今 春上
若菜つむ梅の枝しかもまたゝかくれゆくとものゝ色みえゆらむ
花のならふみはけるおなし中納言のなかへかうなりける
大和千載
人のかゝうたのみにこそやけりけふもやはらきかし
あはれこゝろ
古今 雑
ゆきのなかに消えし山こそねたまゆきのまかせたる妹ん
こゝろみにひともとも
宇多院御製
植のみこの頃かならむをりまたつけれど母御息
所ことはをはてかくれをたちまさりなひとつ契
まつりひてゆきそかくはえなみこそおもふのとかき
海よりよひかけまつける

と青き花威の河にかゝるもみぢさしてかへりぬる事ハきよからず
すやイ
寄せ色紙のしたためて人ことはにおとりにし抄とて
続後撰五二
永縁僧正あつまりける比道(?)に続後の御時ハ京にたちやのぼりける
かくて思ひて御むかひに行ける所に院より八月十五夜を
人集
らまほしきよしを申さるゝ紅葉のしだれハさいへどもそのかみの
かの御中ハあふみのまへなる月きよくてありしほど〳〵ハなほ悔ふる(?)
そこしかるべめぐり給ひて見えしりけるほどえさる由ら
ら(?)申ハいまさら(?)給ひ御簾にしたゝめけるに
たゝことよりこゝに泣つゝてめでたく思ひに思ひさぐりおもひしひたゆく
堂家物朝臣乃威儀のみやこ出でまかりける

と陸奥のくにゝ下りけるに道のほとりの山にてよみける
あさかやまかげさへみゆる山の井のあさくは人をおもふものかは
新古今二
打わたしつれなきをもひとしほにおもひあまりてよめる
見ても猶これはうつくしかるらんとおもひしかどむかしのそれに
みなれしみなれしにおもひし　女
あるときは(?)御猶よかりけんうれしからん心ハなほさいつくしつゝそ見えける
宇多院の御時に後(?)あそびけるに法皇院の御こゝろも
きこしめされあつまりて音よみ給ひし御なかのあはれを
宗于
ことぞみなまて人の中の秋(?)にも草(?)さかりつゝ残ハとまらず

おなじ人のもとにありまさし

季縄のかねみのむすめ右近故后の宮にさぶら
ひけるころ故権中納言（敦忠）のきみおはしけるたの
めたまふことありけるを宮にまゐることたえて里
にありけるにさらにとひ給はさりけり内わたりの
人来たりけるにいかにぞまゐり給ふやととひければ
常にさぶらひ給ふといひければ御文奉りける

後撰巻二〇恋五集

忘れじとたのめし人はありと聞くいひしことのはいづちいにけ
んとなんありける
おなじ女のかうしにすみける時しのびてかよひ給ふ

人ありける頭中将に
くりこまの山にあさたつきじよりもかりにはあはじと
おもひしものをといひやりければ
たえてしたしもおなじくにすみける時思ひてかよひ給
ふ人ありけるに女のもとに来たりけるにかの人の
もとの妻にしのびてかたらひけるにたましひの
あひかたらひにかたらひてもとにかへりけるを
まことにはまことにかへりけるにあらじとおもひて
よみ申
思ふ人のふかき浮雲のかくれなき心をしるらむ
ゆゑはなくならひかれば人の上にぞかねて見えける

経にけり
おなし女おとこのわすれしとよろつの事をかけて
ちかひけれとわすれにける後にいひやりける
（拾遺に）忘らるゝ身をは思はす誓てし人の命のおしくもある
かな　返しはえきかす
おなし女宰相（帥氏）の君なんすみ給ふといひ
たてけるをそらことなれはかの君に
よみてたてまつりける
よし思へあまのひろふるうつせ貝むなしき名をはたつといふとも
返しもえきかすなん有ける

む月はかりはうちは大納言（聖）殿にかしこまり給ふを
見けるに物かきたりしを見れはなかりけれはなめと
おもひわすれは物ゝもいらて有ける
（後撰）冬なから荻の焼原かきわけて若菜（かけい）つみにそ我はきにけり
心よりみゆるにたゝくハめつらしくそめてたまはりて
かくそいひなけのこゑにて涙のもはやまつるし
まうてよみ給ひけるは
あまりけかたちかくれいぬこれかれ（せうい）なりけれ
おくこれなとにならるとてこそ京へのほり
ほとなくなりにけれはうつしひとをたちける

山里にまれしとやめそやまさら雲のはるかにもなき
らんといひたりければ
やまとにはふみも絶えへしゆかもとおもほえけれは
かくなんいへしたりけるなかりけれ
おなし男紀伊国にくたるに海にしとてまかるとて
とゝせさるまてけるまてに女
きの国のむろのこほりにゆく人は風のさむさもおもひしらなん
返し　おとこ
紀伊守の家に行かるに海すさましき風さへ（さひイ）
勘物云内匠助元真行女
修理のきみにむまのかみすみける時かたさりけれは

しかくてまへに海のおもてそれんえまいりのこゑといふより
やかまたは
右近ねきとはおほくたのふすまとしもかくても大
うつりし紀えくて大るのかたといつれなりになりかと
よみてとせさせりける
拾遺抄
いつそれあまたれひとにこりけん何かなりのてるやまを
あかくなりしおとゝのあはれの志はうちの人に
とつねてといつりけれは手之へし
又おなし女よりかよふなる附けにそえけたりけれ
ほかなくていそ紀かたすゝ茶飯の露さへかく人に

おなし人しよみ奉りける
ゆふされて我は消えなん白露のかゝりて後の歎はせしはし
ふるし
返しかへる朝のまに見てかくて後はものやおもはんと
おなし女よけさかくすくすれはいひてかへりて後ふよなと
言ひおこせける
これやしきゝにこめてさらしかへしくるとはかりにや修
修理の君し
たなはたの地とおもひける事の人のはかなくて有なん
おなし女に故兵部卿宮もかよひたまひけり

かくし給へとなんきこえけれはきこえたまひける
形部丞二
ゑるくしたりけるもさんくまゝ行のよ二ころにあるこのことは
三條の右大臣（定方）中将にいまそかりける時祭の使に
さゝれていてたちけりかよひ給ける女のたえて
久しくなりにけるにかゝる事なんあるあふ
きをもたるへかりけるをさはかしくてなん忘れにける
ひとつ給へといひやり給へりけりよしある
女なれはよくてをこせてむと思ひ給ひけるに
いろなともいときよらなるあふきのかなともいと
かうはしくてをこせたりひきかへしたるうらの

かくてふくのかひなかりける

(拾雑上) ぬれしとそいかにしも今は我身のあしからうらにおもほえん

(やまと物集) すせなん心ちあるくとみえてつきあへまうとおもひしもかへし

ゆかしとて、よみける物と我ゆへにいとゝかぬはたにかけるらん

(後撰) 敦忠 敷嶋中納言のもとにいかなりけるこのよのことを思ひけるよみてつかはしける

(実頼) そのほどの人の時ことにさけれ

(後冬) 物おもふと月日の行もしらぬまにことしはけふにはてぬとかきく

(さらら集) 心すめん人をけるよしもありなむ

(日並) つらゆきかくてうへにもよるの人ゆきて有ける(拾恋一 三ていかん)

かくてよくて清かなにあはれにかなしくなる

(日並) ふるき人にくれなゐのやうにかよひもかよふ人のなかなりけるを

是も昔の中納言兼輔(雅子)のこの後年はよくひとりて

清の家にてあるときは人によまけるうたに伊勢の斎宮

の清らにあひはなれたるにうらみやくものとおもふ(そて)

ここひ思ひつゝいのちもよみくるまのそこにかへりけるを

(後恋五) 伊勢わたりこちよりの浪にかくれつゝも今はかひなくおもふ(おもひいつることの集)

かゝるから物しらんありけるに

(代明親王) 敦中納言の心はうせ給ひて後ちいさき君もあらたに

かくこもりて三条右大臣殿にすみ給ひけるのちつかはしける

心深くしてそのはるかなるひとにいもとくしなりけるを

中将はかの小一条殿とゝめし九君と申しゝこそ
まへんとおほりし御かたとすみけるはさもやとおもひけるに
たかりしきこゆるにつきてあきまけん左大臣師尹のきみの御
返りきこえし給ふ御かたの御はらにこそあらん
ありしかどをかしく心得させたまひてさるおりぞかし御母宮
内宮にすみたまひて給ふ所にかの御息所仁善子の女御
なりけり
すはいへのすなはち給ひておなじさまにて今はこの御方のかな
しき家よりかの
ときにしてかくいひたへくるよしもかのこあるへくおもひとゝこそはけれ

かくすんありけれは
おほかた右のおほいとのゝむすめやとかきつゝみてかれりつゝ
さはるおもひ後式部卿敦實の宮すみ給ひてたてまつりて給ひ
けるはいかなるよしもなかりて御かへりことにかよはせ給ひける秋
なにことにはきこえけるにつきてもありけるにかく
んとかゝる家れたのしまゐらせて御さまにもてなして
おほくに
志賀山に詣しゝ香記今はおはしちれんも小集かゝるとて
かとそれんまとけるかたになはしまてなにゝしきありやく
て九のきみの御ほどの師尹のきみにありをなりけるて

おなしころ御息所をと言出てしあをとしたりけれは
左のおほいまうちきみ大臣の御堂に給ひし花の御ことにて文奉れし　実頼
給ひかりへやのさしみむところ給ひかひねといひて給ひて
おもし流れ白し和歌よ
波のうへにまでとまつる海ならはやすくこそ思ひもかけむ　忠平
思ひしにものいつみなしう給ひ給ひてなかその月日　源経子　宇治中将女　延長三四四
わかをそしらるゝれいそのかしこまりきこえける月の光を
しらぬ身をけふにしもいひておたまへてなかへておほ
さまふれるはかしこまりては
かくまかりて月のめくりて出るまてかけまくもかしこきは　続後撰雑下　またしもえ
おほいまうちきみ左の大臣の御ためすかりのおほさ　実頼
かくれぬにもなれてかけまく御ふけるはこまゝえみのことに
おもん問ひ給ひしをとしと思ひ給ひていひよるかひはし給はる
さりけるまゝ御返してまゐらせたりけるかしこまりて
おもふてきゝれいつみにまいりたるまて院のおほせこそ
のちのちあはれにいりそかひなゆるされ給ひてのちのあはれき
さくら給ふそつよみ給ひしかは
おもへとおもふそかしこもとのひとのかなしさもみたまへける　あふさかイ
三年ありてなくなりたるそおもひて中務の宮おもひ給ひ
しけるかな

亭子の帝の御供におほきおとゝ　忠平　大井につかうまつり
給ふに紅葉小倉山にいろいろいとおもしろかりける
をかきりなくめてたまひて行幸もあらんにいと興
ある所になんありけるかならす奏してせさせ
たてまつらんなとゝ申給ひてついてに

拾雑秋
小倉山峰の紅葉心あらは今ひとたひのみゆきまたなん

となんありけるかくてかへり給ひて奏し給ひけれは
いと興あることなりとてなん大井の行幸といふ
ことはしめ給ひける
大井に季縄の少将すみける時にみかとのたまひける
花おもしろくなりなはかならす御らんせむとあり
けれとおほしわすれておはしまさゝりけれはすゑ
なは

拾雑春
ちりぬれはくやしきものを大井川岸の山ふきいまさかりなり

とありけれはいたくあはれかり給ひていそきおは
しましてなん御らんしける
かくてすゑなはやまひにいたくわつらひてすこし
おこたりて内にまいりたりけり公忠の弁の
掃部助にて蔵人なりけるころなりけり
それかもりのすけにあひていひけるやう

かちはよくとこありて殊にいとむつましうなん
とねく侍まれはおんさい季侍るうちにことにこの
く由そく侍ること御のうちいてあさそまかりなり
うんよりふそうしたまへぬといひなんとすらそしまのそ
ねこ日はかの所にておかねのいとしかりけるをふかくとふ
葬とふをたりけるをみてよには
新古 哀傷
悔しくそ後にあはんと契りけるけふをかきりといはましものを
とよみたりけるをきゝてあさ海しくそ激とよりて泣
ひとふそはかのめのと行合給のひまいてよりくる
里給ひ御めりとひてあそく成ゆへにいとなくさ

えさとうかたはらに海のうちなりいひて侍よくる面
さうれ家のそまつりていてかりけるのこみせ
かうふいてをかしそよき侍をそめりて大をゆく宗
まきおかねのこあかふいてさ侍きそされはいてはし
うれめさのまさりてかいて侍門志なかせくそ
こゝひやまて紀みのまひゝいみすかなけれ
たまくかうりけるを見てあのけることとかんのく
上件
たりけるをいまみれはよくもあらさりけるかなん紀
そのゆへひしあれ
土佐のかみにありける酒井の人真といひける人
酒井 人真

あひしりてよろしくわかれてのちさすらへありけるかなしくおもひ
よみやりける
行人はかへしもせんとやつれなくてのみつきにける
平中かいろこのみけるさかりに市にいきけりなかころは
よき人々いちにいきてなんいろこのむわさは
しけるそれにきさいの宮の人々いちにいてたる
日になんありける平中いろこのみかゝりてになくけ
さうしけりのちにふみをなんおこせたりけるされと
おほくの人のくるまなりしかはたれにある文にかと
なんいひやりけれは男のもとより
ももしきのたもとのかすはみゆれともわきて思ひの色そこひしき
といへりけるはむさしのかみのむすめになんありける
それなんいとこきかいねりのきたりけれはなん思ひの
いろとはいひけるさてものいひかはしけるほとに
てつからかくれておはしけるかやとありてえたえす
しのひてなんかよひけるそれもこのよしをきゝて人
ひとつけさせてかくそひとりあそひをしけるかなとて
せそこなんかけるかへされはひとりなくれけるあひ
なくのちのあしたに

えせすなりにし思ありしてその日まてそこにゐたり
とゝをんなはよろこひてまちけるにまてとまちけれは
人すといひおこせたらのはしめよりなとをとこ
てかくあひなりぬれはつらきことはおもふにいとなさけなく
また人ともあはてこれなとかはまうてもせすして
よにとみこれの事かなやなにかとおもひわひて
よろ人のいひけれはこゝろうくおもひてかみを
ゝのかきりをやとおもひしかはひてをろし
えんなとをんなすへてもみなまてとかみのひ
よねこのみちとのこなすまてかたらひ

人なとたえてはなれむそかくてなきやみ行つきて
使ひにもあらすかくてはなそらみえてこと
ちかくもせむとおもひてそなと物もいはて
よりてはなふ人をも見てそいひおこせけるなかに
とふらひてまつりあされなりけるをんな
あつまりてかなしくのひよはいてくかな
なまてはなすかとおもひまたかく
かくておこなひとるせんかいうなき人
またいひさつらひてかくいひけることなりけり
平中そのあひけるにはしめて人なとこせんとおもふ

かゝるほとにはゝきさいにくらゐのかみのへいふまちてむかへ
まうそむほしきらかりやあらとおもひなからてやまつ
てゆきそうかきたれとせうえいにんにとはへるに
めそつましてやけのまにおもしてかはくふにたてし
ゆくひとからうしそてたえになりにたるすかみわた
めのにふかゝる大井にいそておもしろきぬさとにまかせ
ふるまさのまかいひいてつゝおもひありせをへ
ことかつらのみこに式女のかきこゝろをえてもふかく
たちかへれはおりてこゝろたえへかたへの人を
おいりふるいふのにかはつゝ女いかふおもかつらのみこにをくやし

とこなりけんとおもひたまへたちひとりもなくなりなん
ことそあなすさへおもふいかんとゝおもとおそきむん
わかおもひさえてさへひとはよしんにさむにさてうけた
ことまそてへはかとおさなにおもふにのおかきけん
ものゝはしのふけてみまそはその家の女すりもて
はなまそこらたそとひとてひとゝいくてなくれ
こもりをさうみにはしれなるにかふ成すこしふ
そのゝそむそをたちいてあやしきをりもてすい
すとこそ成これらん
あすか川ふちにあるわかやとしもかへてせの一にかたる成りけり

とゆふさりまてになりにけれはみな人しもとまりにけり
見ともくるしとてよとゝりをこそはけふより
いやうれしとおもひけるかなたちにけるを
時よつかへむとたてまつりける御ためにもあら
ふたりもなくなんとはあらましに
れいもしらてとしころ
みしかなかるかたき
きめんとはなれ
るかなく
世はうつりかはるともつねなきあすかの川のよとみなきや

ものゝうへにてあさゆふことに見ものとおもひけれは
きこえたいまいまはかくてとおもひありけるかく
てすゑつかたになりそのこと女はめのとこそあらよ
くりかへしあはれやうけたまはるといひて
なくことかきりなし物をたまはることなんおほえて
さふらふまてといひけれとゆめにもいはてそれは
あやしきことゝいひてのちはたいまをなんいひける
うやまひみえそこなんおほとにふかきなにおほえ
しけるか
しけもとのおほいこ女

新古恋四

恋しさに忍ぶの翁と思ひ出でて人あるかなとこそ

少将云へし

かしこに我をこそ思へ露ばかりの情はなきに契とおもふ心に

中興のもとのすけがむかし女のもとにいひて

心やさしく思ひしに人しれずもなく人と

かくひたすらにもてなしてあるさまけしき思ひて

あり(験者)てそのうへ人のあのこひありけむに何事か

よくおもひしとおもひしにてうちとけて思ふ人

いとゞおもひそめてしをわするゝ心ぞおもふ

伊勢物語にかしこくおもひたちの情よき

川のほとりに翁よわれこそいひかよひけるに

梅しるかくもと見るまにうちみるをりける

なまめかしくおもひて心をとゞめ見るに出でしの

よき人の梅をたをりてはけいとこそは

後撰恋四 思ふ人の心にかよふ人のなかに

[illegible]

ともひとつもあれやしくたえてとをはるかに

しかもけしきにつきおもひしかはふかくて

又山をいふにかゝるそのゆゑをたのむは

かくして思ひしもそこはかとなく心の[illegible]

ましし
ゆそしは忘れさりし等の筆の始にいひ出しき
ゆかすんこうりける文志やうさうたいとこ（浄蔵）
我為ふ川に也人とはかしなかしに何の能すれはさや根ん
さもいひかり此女に恋かくかしつきそ見こたらかんを
ちめようひ給へてみるにあんとてあらるを悩を
それとおもひてそ恋まけ良あやもみたと縁り
ふかり故（元良）親王の家の女の車にて逢うてしかとも
もとめよう思ひ給ひかりみて
萩のなつゑくことにそ根城の風ようありて川にほくて

さまて也共なし　云云
はくるそ人はみちのめ也も此川の滝るんへあしこそ共へ
か庵し
せさき川の岸さとくはるに院こ給ぬへくおもみゆらんを
まくそこの女はそこその地之所も借まてあのてかへて
あつけまほみこおりし海したりけるに月の傍やに
何そ見それそよみ給ひける
よるくにいてとみすとけはれそて入にし月にいひてやと
なんとなきまひかりかくてあへこき銭共し給ひの
女月とさりそて見る度き女ぬ女の身にさくかくはもわし

忘らるゝ身ハ我からのあやまちになしてたのみし心とゝ
うらみの心ハかけたるをそのつとめにかはしさけて
なりける
枕しくさもおもひ草ふしてよまれたりけるを
まけましとおもひてよめる女
忘らるゝ身をしのふの山の端とをしく秋の野に乱れて
返し
なく鳥てなかなかおもふ人の身のうへにやけ
枕しみおもひし家
忘るゝまてとなむそれのあるの下にこそ入るかひは

かへし
山里は世をあきてもすむかにさけためゐてもけるをよくちはなれて
なむいひやりけると女
先坊の御時にさふらひけるかたよりむかしけるの
南院の今君といふハ右京のかみむねゆきの君の
むすめなりけりそれ太政大臣（忠平）の内侍のかんの君（貴子）の御方に
さふらひけるを兵衛督（師尹）の君あひ
思ひてすみけれはしかしたまひけるをおほし
わすれにけれはさまさまにつかはしたりけれは返しかく
たまへ

かりそめに京の姫しみし常夏の花を折りてといかで忘れん
となんありけれ
おなじ女おやのまもりうしとかよひて又のあしたに京にかへりての
やまかはなまりたるしらじかともいひそめけれ
ゐつりけり
後撰雑二
我のみしることとしもや河よどの葉にいほる露はいのちの
おなじ女
大宮はらゆらひとつの京を月ころかよひて被ぬまゐりけり
大膳のかみ公平のさんえふれむすめをあはむとおもひて
りすみけりおはしてこれはこをこはいのましりかれのこと

ひるはいつにひさりにけりあはむとけれ　信明
倫後守のあきう
おなさやの君とあはれけるに如きのあはむとかよふ
もうすゆをとりまされはよみて思ひて
このみもやうれしかはと御別れを雑にいひて送りん
こふんありけるに
おなじ女後にえ来おたへのことなれはよきに
とこをたのけるはふきにまかりけるのつとめ
こら風のふく日としに吹るにまかれつかへのうちにも
時しれとよみたり
えやうぬのことはてけれての後條材の家にすましかる

待まそてつきとくりぬるの女とも契りてよつそてちきりおきし
さそひつりよみて尋りける
昔をそてふかれしとすまつる衣手とあるかめつらしとよそにみゆる
てもえ隠をも山のよはれもそしとをたのみか
法せふおそてぬさとり起意につれひたる契りのほか山賤
乃もふ心苦あんかへしは忘れ次手にそてこれは女かはし
ものみすり
大宮もたえぬかなかねかふ神無月我のみまて忘くるとこへは
これは契るし人
新古恋五
逢て此後の心に比かへまそてさるへく離しそ方るまつ

いはぬまに七夕の心のひそあたを用て
からま清く尋りたる人里ける
神としはかさらしかてたなはたあかねおふひらに名
右の歌しは頭ふおりしけり射小お式のぬかやのあと
ありよりて給ひきる
続後撰恋三 師輔
秋の夜をそてたのめしことのくふ今もかまつる露のはれ
とある 天暦乳母
梅は香と露もとくもの花の我身ふくえ色はかりけ
こひしさはかむすれ思ひのとく
なかくもたのまけの世中と神ふ繊のかへる身と

桂のみこよしたまへり

露しげき草の袂を枕にて君まつむしの音をのみぞなく

閑院のおほいきみ

昔よりいふなることはありそ海の浜のまさこは色もまされ

おなし女にこうらみくゐのかみおほくしたまふしける荻原のさ

こきのよいにてやとをたまはりけるやまひいとおもくしてを

こゝろけるにはすりつゝそたいめんし給はんとて

かくてこそ思ひとゝめたる命をそあふことゝへやすらんやすき

やゝこりぬれのおもはいさみ給へし

後世にはさとりてこそ恋てれ山かすかに独こそなんとけし

やゝひぬりおもてかへさたりけるにおもえあはれまし

こゝろやありけるそのあはれはりけるしるたるに侍る

けてあしたよりしまひつゝとせ給へりける

蛍はゆふれもかはれおもひ寄にとゝめなるとそすはそえ

もし私かいまた給へし

院の孫さあれ久にゝ宮しかるよりかの式部卿の宮行き

おほいとの（忠平）は大臣になり給ひて年ころおはするに枇杷

の（仲平）おとゝはえなり給はてありわたりけるをつひに

大臣になり給ひにける御よろこびにおほきおとゝ梅を

折てかさし給ひて

新古秋上
とくとく心をく待ちける咲けるの梅花たゞ植ゑよとさし侍りける
心ざしありけるをとこの日は事さもと思ひけるに中絶えにけるさゝ
栗子
くしにまかりて侍りけるとて三条の太政の大臣の女御
かくて世にはあらで川をわたりけるかな
いかでかく年ごろもたえて侍りかゞ思ひゆく猶のほどとたの
ましきありけるを見て返しよみありける
和らぎ侍りけるに、かくて侍りけるものあはれにて左
實頼
の大臣の中納言にてはべりける時たまひける比
こゝろをのべてまかりけるほどかくの事侍りけるに歌
よめり

花薄きはみにこえん年ごろもせんたきのゝ昔にかはらぬ心ぞ
左孫たりし此式部卿の御むすめの御時
参り給ひし時に中将の君にてありし時の御返し
心ざしありける女
ちゑの中宮の御娘の一まかりたる
あらこの志深くてたりけるにさそひみちのく
増喜
宇多
清けあるにおはすなる消の君も侍る
清くいはずなりけるこのやうにまかりて或日志
加へにまかりてあひたりけるに中納言の来て
わざとよみける歌にて侍りけるもてなし

思ふらんと志かりけれは捨てさせ給ひてまし
昔こそは別るゝことよりもとをき我か物は思はましかは
玉えし
世のなかはかけなく物とは思ひなから我かなかはかはるらん
思ふらんなとけることはもとよりおもふなかなれは
物のしるききみやまさる人の心はさすかによくなる
草はくさかなまさる露の身なれはやなくしうくて成ぬらん
本院の北のかた（時平）は（国経）大納言のむかしの妻になむ
父は故みのゝ平中かよみかくしけるは
春はまた縁よりくる［illegible］我に［illegible］

思ひけるかくて後ひとへに何事も
その北の方は中の宮に侍りてさるほとに
ここよりみこくとこころをたのみけり
紛来のすくせも思ひまかせつゝ後はしかいせ
そありんいひけることのはしそれよりはよくし
てあやうかりけれはまてはてかくしの後
家はた大納言（定国）の北のかたは（時平）のおとゝの
いとくるしきまゝにうち恋ひてすくなくもあらすゆく
みくのゝゆくへもしらすかくなりにける
し侍るたてまつりあるとき給へりける

あけくれに三輪の杉はなれにあつまへくたりしか
おもふまゝにはなれしひさしのきはつきてはせかはらの
橋の渡せる橋の霜の上をよもすがらながめて侍りける
かなしさにおもへるにおなじのおもひにも歌をよみし
心ありしてそのよ一夜契りし地まつりにあはてはなれて
大ねも拾かへりにし心にも露にたえてこのまねくしかの
このたひはこゝのむすめあはせこそあはれけりとぞ
とひけるにこそいひかはしけれとてかのひとへのはなれて
おかのためにけらしてこそのはるの花のおもかげなんど
といひけるが心の中にふ

我君はつ村すはちかひにむすひ給ひしに海そこにかけて
心あらんよみそめけるを海にとふかくしてちかひさだめす
めぐりあはむとあらけける
けふしはあけぬるひかりさきにてこひわたるゝあり
おもしろく我へけるものふれんあるまけの年月かく
三年ありやなるをあはれをするゆへの比ひまになしてそ
歌も思ひけるむかしのくらもみなみてあはれなるて侍りと
いひてあはれにかくなりにしかば好古すこし武士のその何
うひよくしり侍りて名をも歌のあやまりにやすらひとのよろ
誰そひとめてゝひとへんとよりてあるへん心ゆく

かすかなるさまにてかくれにけりすみけるを
見しれる人もいとあはれかりあへけりさうしに
たまはりけるとなんかきてかくれたまひにし又
侍りけるにかくありけるをかくれたまひにしより
あやしき所にありけるを入るあやしくはなれて中
これをひとりさのみていみしうあはれかりけり
侍てよみけるてをそかくなんいひける
後撰雑二
むかしみし我里人は川のせにかくいひてそなきける
思ひよこたへけれはありけるをそおもひける
ひとよかはさそのあはれをおもひける

又おなし人大弐のくらはしにて秋のはしめとよみをきけは
麻の葉はいつはけり紅そめたる山のさかりん
らひちつのこ紅ひんよもしといひてすゑの心をあつ
まりそよとかこつきすゑをはきさせんとてやくいひ
ける
やとはこの中にそたてはおもほしいかし
思ひそめつゝやさしすれ
秋の山へやうつろふを見ん
とそおけるたりけるに
はくしかりさやあれ女房におもひ成ぬのそよみける

人とかむる音にくらまきれ殿にみる契り月のうちにかねく
とあんにうりかゝる
これも後くしけるまける女
秋風のふかや後ちに花咲くるかな残先をしくらん
先帝の御時卯月の後は中ちのめうくひさものふ
るねとよませ給ひける　小忠
またたゝゆるのりと驚かれぬことも知らぬなる
嬉しひよこたりける
おもしみをの御時給ほとめして月のいそはもしろ
さ秋はあかぬ影とありても月をとゆきみのきはかへ

たかのへを我のしけるまで何の心ひとれなき
みりしれかとふさかしむて後のう何つるを
照月とゆきうつりて変らぬといふ也とけて里は歳
詠くふ契のかなつきそ又
御やしれあることはつりかふにて津風にて咲てさうし
契りしみを月の契りしたるさき秋こそかよみやとい
らうたら此御さしぶは残見あのかを給ふ流れ又た
小忠さつしてひとり我まてふかの御さしとりうに
うら哉ひとかさを契さる女にてきこへけるとか中
こそいひうれよみりと小忠は残らくめしてりを

日本政府圖書

ちきりけれはかく浅からぬ契ひてつみしりけるなるへく
雅てかくれそといふて人もせんみしとをいを
しう侍やしかまに捨ひ侍り　公忠
思ふらんみちからぬはしれすとみなそかる
しかまにかれとよめりけれはいとはかなく然て捨
給へり

群書類従巻第三百八十上

国立公文書館
National Archives of Japan